

受講番号 19053 学校名 城北中学校 氏名 平川 雅浩

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生 生徒数 183名
科目名 1年 単位数(授業時数) 3時間 使用教科書名 NEW HORIZON English Course1

クラスの様子・特徴

担当する1年生は、「高知市国際理解推進特区事業」における英語特区推進校をはじめ、それぞれの小学校の総合的な学習の時間において、英語活動に取り組んできた生徒たちである。そのため入学当初から、英語学習に対する期待感には高いものが見られる。

問題の確定

英語学習への意欲や興味・関心を維持するには、「楽しい」との動機づけから、「分かる」につなげる授業づくりにあると思われる。

予備調査

A 授業の観察

5クラスともにそれぞれの雰囲気を持っているが、全体的には元気で明るく英語学習に楽しく取り組む生徒たちである。ただ、生徒一人ひとりに十分配慮する必要があると思われる。

B 生徒による授業評価

英語学習を進めるうえで大切なことに「自分のやる気」を一番にあげている生徒が多く、次いで「学級の雰囲気」となっている。これは、英語学習への「先生の教え方」、つまり授業展開が十分なものとなっていない裏返しであるとも考えられる。

C 学力データ

一学期の中間テストでは、発音と文字、英語と日本語でのあいさつの仕方が理解できているかを確認した。しかし、発音と文字を結び付けてない生徒が各クラスに数名ずつみられ、「書くこと」と「読むこと」への重点的な取り組みが必要であると思われる。

リサーチ・クエスト

発音と文字を結び付け、英語学習の基礎・基本となる語彙力を高めるにはどのような指導をすればよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

⇒ 毎回時間をとり、単語ビンゴを行うことで発音と文字の結び付きに慣れるのではないかと。

実践1

⇒ 授業開始から5分程度の洋楽を流し、曲が終わるまでの間にその日のビンゴシートを埋めるようにすることで、英語学習に対するスムーズな気持ちの切り替えと、単語の定着を促す取り組みを試みた。ねらいが発音と文字の結び付きであるため、はやくビンゴになるのではなく最後まで単語を聞き取り、ビンゴになった数をペアで競うように工夫をした。

検証1

アンケートでは、ビンゴを通して発音と文字が結び付き、単語を覚えるのに「役立った」とする意見が多く見られる。しかし一方で、「ぜんぜん・あまり」と回答した生徒が20名いたことから、成果が十分みられたとは言えない。このビンゴを実施する大きなねらいは、英語学習を苦手と感じている生徒の基礎・基本となる語彙力の底上げにあるため、今後の取り組みには、より工夫・改善が必要であると思われる。

仮説2

⇒ 「読むこと」ができなければ「書くこと」は難しい。簡単な評価の観点を示したリーディングテストを行うことで、発音と文字を意識的に結び付けることができるのではないかと。

実践2

⇒ リーディングテストよりも、暗記して行うロールプレイングテストのほうが有効であると考え、1年生の教科書にあるハンバーガーショップの場面一度だけテストを実施した。相手役は教師であり、セリフの多い店員役は[5・4]の評価を、セリフの少ないマイク役は[3・2]と評価を設定して取り組んだ。なお、何回もチャレンジできることとし、ジェスチャーなどの工夫が見られた生徒には○をつけることとした。

検証2

どの生徒も十分に意欲をもって、相手役である教師とやり取りをすることができ、評価[2]以下の生徒はいない。ただ、友だちからの視線をプレッシャーに感じ、声を出してリーディングを行うことに抵抗を感じている生徒もみられた。アンケートからは、普段の授業の中でも「声を出して読んだ」とする自己評価が全体としては高いが、クラスによるばらつきがみられる。

仮説3

⇒ 課題学習プリント(通称:白プリ)をユニット終了ごとに活用するうえで、教師が一人ひとりのプリントを点検し、全問正解になるまで取り組むことで、「書くこと」への意欲が高まるのではないかと。

実践3

⇒ ユニットごとではなく、パート終了ごとにプリントを活用した。ルールは「教科書・ノートを参考に自分の力で取り組む」と設定し、パーフェクトを目指すこととした。ただ、各クラス約36名のプリントを点検しアドバイスをするには15分～20分の時間を要し、全問正解となるまでやり直しとなるとそれ以上である。そのため、間違いの多い生徒だけ再チャレンジを促した。

検証3

課題学習プリントは生徒たちにも定着した感があり、アンケートからも「書く習慣」が身に付いたとの結果が一番多く見られる。その一方で、「書く意欲」の高まりがみられなかったのは、理解が十分でないためパーフェクトをねらえないとする生徒の気持ちの表れであるように思われる。つまり、仮説として設定した「書くこと」への意欲の高まりにはやはり「分ること」が土台にあると思われる。

研究の成果

週3時間の英語の授業と、総合的な学習の時間に位置づけられた国際理解の学習を合わせると、生徒たちはほぼ毎日、外国語にふれることとなる。そうした中、「英語嫌いをつくらない」との意識のもと、生徒たちと一緒に取り組んだ英語学習に対する授業評価はアンケートの結果をみても良好である。しかし、生徒一人ひとり、個に応じた学びを十分に保証できているとは言えない。今回のアクション・リサーチへの取り組みは、本来の意味での「英語嫌いをつくらない」ために必要な学力定着における指導法の工夫・改善の一步になったと思われる。

今後の授業改善の課題

2学期終了段階における生徒たちの英語学習に対する自己評価は、関心・意欲・態度も含めて5段階で4が最も多い。しかし、これらは満足度であり、決して理解度ではないように思われる。この数字を生徒たちの確かな学力に裏打ちされたものとするために、今後も「書くこと」「読むこと」を中心に基礎・基本となる語彙力を高める指導法の工夫・改善を行い、「楽しく分かる授業」をより構築していきたい。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

088-822-4146